第４回研究会

水鳥と湿地の宝を持つ湖北地方

龍谷大学非常勤講師・里山学研究センター研究協力者・琵琶湖ラムサール研究会
須川　恒

今回の合宿をした琵琶湖・水鳥湿地センターと湖北野鳥センターは長浜市湖北町にある。湖北町は2010年に長浜市に合併して長浜市湖北町となった。湖北町の鳥としてコハクチョウが指定され、「コホクチョウのコハクチョウ」として親しまれていた。

合併前に、湖北町の自然や歴史を啓発する趣旨の湖北町バリュアブル大学の連続講演会があり、私は2008年7月4日に湖北町の大きな体育館に集まった町民や中学生の前で「水鳥と湿地の宝を持つ湖北地方」と題して講演をした。この時の講演内容を通して湖北の水鳥と湿地保全の概況を紹介する。

湖北地方で越冬するオオヒシクイの繁殖地の探求

湖北町の湖岸は遠浅になっており、越冬期多数の水鳥が多数集結する。1982年１月、湖北町の湖岸で水鳥調査をしていた私は、雁の調査をしていた日本雁を保護する会（宮城県、現会長は呉地正行氏）の会員に出会った。当時、雁を保護する会のメンバーは、湖北地方に渡来する雁類（湖北地方は雁類渡来地の南限で近畿地方ではここだけ）は雁の一亜種オオヒシクイであることをつきとめ、オオヒシクイが渡来する日本海側の越冬地の調査を行い、また渡来地の保護を呼びかけていた。私は1970年代末に京都の鴨川にあらわれた金属足環つきのユリカモメをきっかけとして、ロシア（当時はソ連）のカムチャツカ半島の鳥類学者N.ゲラシモフ氏と交流をはじめており、この出会いがきっかけとなり雁の渡りを巡るカムチャツカと日本の人々の共同調査がはじまった。

番号を刻印したプラスチック首環を日本で作ってカムチャツカへ送り、カムチャツカで雁に装着してもらい、日本国内でその個体を探すという調査である。最初の数年はうまくいかなかったが、1986年にカムチャツカ半島西部のズベズドカン湖にオオヒシクイの集団換羽地が発見され、そこで装着された個体が多数日本国内で発見された。1987年には湖北町の琵琶湖湖岸や浅井町西池で４羽の首環標識個体が発見され、湖北地方とカムチャツカとのつながりが明らかとなった。

雁の生息する湿地を保護する

当時雁類が生息している湿地は、さまざまな開発や密猟といった多くの問題を抱えており、関係者はこのままでは「湖北地方は、かつては雁類の南限の渡来地だった」となってしまうのではと憂慮していた。一方、1988年に湖北野鳥センターがオープン、1992年に滋賀県がヨシ群

落保全条例を施行、1993年琵琶湖はラムサール条約湿地として登録されるなど水鳥の生息地としても重要な湿地を守ろうという動きがはじまっていた。

また、1997年５月に琵琶湖水鳥・湿地センターが環境庁・湖北町により開設されたことは、湖北地方の湿地を考える上で大なできごとである。雁類に関心を持つ人々が、国内の雁類渡来地目録を作成（1994年出版）したが、この準備中の資料は湿地センターを湖北町に誘致する際に、関係者に当地の意義を明らかにする上で大きな役割を果たした。

湖北地方のオオヒシクイの渡来数の減少が憂慮されていた時期もあったが個体数はその後回復し、コハクチョウも徐々に増加した。清水幸男様らのオオヒシクイの記録を滋賀県立大学の村上悟様が中心になって解析した結果（村上他、1999）、寒い冬は北から南下し、琵琶湖の水位が低いと湖岸が利用しやすく渡来数が多いことが判った。

水鳥が示す湖北の湿地の重要性

琵琶湖の湖岸には冬期に、雁やハクチョウ類、多種類のカモ類やカイツブリ類など多数の水鳥が越冬する。2007年琵琶湖の全湖岸域を船を使って調査をする機会があり、湖北地方は越冬する水鳥の個体数や分布からみても大切な区間であることが再確認された。

特に個体数の多いカモ類も、ガン類と同じくダイナミックな渡りをする。環境省によって2008年の２月から関西（兵庫県伊丹市昆陽池公園）ではじめてカモ類のオナガガモやヒドリガモに衛星発信機をつけて繁殖地を探る調査が行われ、最新の渡りの情報があきらかになりつつある。

水鳥ではないが軒先で営巣するツバメも湖岸の湿地と重要なつながりを持っている。軒先で営巣したツバメは、７月～９月にかけて湖岸や河川敷にある規模の大きなヨシ原に集結して夜をすごす。湖北のヨシ原でもツバメの集団ねぐらができ、観察会が行われる（龍谷大学深草学舎のサマーセッションで宇治川のツバメの集団ねぐらの観察を行っている）。その後ツバメたちは南の国に渡り、琉球列島や台湾を通って、フィリッピン、ボルネオ、インドネシアなどで越冬することが知られている。

湿地や雁を巡る交流・湿地の持つ価値の発信

カムチャツカ発の標識個体は継続的に渡来し、2003-4年冬までに計38羽、延べ63羽（冬）が確認され、標識後10年経過している個体も確認された。

ロシアの研究者との交流も注目される。1995年湖北町長とカムチャツカの鳥類学者N. ゲラシモフ氏との間で交流に向けての手紙が交換された。1997年N. ゲラシモフ夫妻が開設した琵琶湖水鳥・湿地センターを表敬訪問した。1999年湖北を代表して村上悟様がズベズドカン湖の調査に参加した。その後もロシア人研究者の来訪は続いている。

最近は、池の整備や道の駅建設など、渡来地にかかわる事業が行なわれる際も、関係者とのうちあわせが事前に充分おこなわれるようになった。また、びわ町（現長浜市）の早崎内湖干拓地では、2001年11月から17haのビオトープ水田実験がおこなわれ、数百羽のコハクチョウが利用するようになっている。

湖北野鳥センター／琵琶湖水鳥・湿地センターでは多彩な活動が行なわれている。ホームページなどを通して野鳥情報を積極的に発信し、湖北地方の観光拠点の一つとして、センターには年間30,000人以上が来訪するようになっている。観察会や鳥のおはなし会などの行事も毎

月開催され、環境教育学習の場として多くの小学校が利用している。

湿地保全のための国際条約であるラムサール条約の普及啓発のために、琵琶湖ラムサール研究会の活動として湿地センターのホームページにラムサール条約関係の文書やその解説が閲覧できるようにし、また冊子（村上編 2001）も出版しており、全国の関係者に利用されている。

私の住んでいた京都市伏見区では、足元にある伏見の歴史や自然・文化について掘起こす「伏見学」という試みが継続しておこなわれ出版物も多く、私も「伏見の湿地と水鳥」という講演で、かつて伏見の空を舞っていた雁について話した。現在、雁が空を舞っている湖北地方には「湖北学」としてまとめ発信できるものが多くあるだろう。

足元の水鳥だけではない多様な湿地のいきもの、湿地活用産業、伝統文化について調べ体験して、多くの人々が発信していく活動がとても大切だと思う。

もっと知るための本や文献

池内俊雄．2004．なぞの渡りを追う　オオヒシクイの繁殖地を探して．ポプラ社．
石部虎二（須川恒監修）．1980（2003）．かいつぶり．福音館．
石部虎二（須川恒監修）．1982．ゆりかもめ．福音館．
川道美枝子・須川恒．1998．ツバメの街（森の新聞13）．フレーベル館．
呉地正行．2006．雁よ渡れ．どうぶつ社．
※須川恒．2000．水鳥を通して知る琵琶湖周辺の注目すべき湿地の存在とその保全．琵琶湖研究所所報第18号：97-103．
宮林泰彦編．1994．ガン類渡来地目録．第１版．雁を保護する会，若柳，316pp．
※村上悟編．2001．ラムサール条約を活用しよう．湿地保全のツールを読み解く．琵琶湖ラムサール研究会，55pp．
村上悟・清水幸男・上野健一．2000．滋賀県北部におけるオオヒシクイ個体数の年次変動と環境要因．日本鳥学会誌48：219-232．
※村上悟・片岡優子・山崎歩．2000．湖北地方のオオヒシクイの生態と生息地保全．琵琶湖研究所所報第18号：109-115．
西野麻知子・浜端悦治編．2005．内湖からのメッセージ　琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性．サンライズ出版．

（多くは湖北野鳥センターの本棚にある。※印のものは琵琶湖ラムサール研究会のウェブサイト　http://www.biwa.ne.jp/~nio/ramsar/projovw.htmlから読むことができる）